論文内容要旨

論文題名　　アスペルガー障害における共感指数（EQ）とシステム化指数（SQ）

掲載雑誌名　　精神医学　第 56 巻　第 2 号　133～141 頁　2014 年掲載

内科系精神医学専攻　池田あゆみ

内容要旨

近年、アスペルガー障害（Asperger's disorder ; AS）は成人の精神医学においても注目を集めている。しかし、診断に必要な幼少期の発達歴は養育者の記憶に頼るしかなく、また気分障害、不安障害、統合失調症型パーソナリティ障害等との鑑別が容易でないため、成人 AS に対する診断補助的な指標の確立が求められてきた。

Baron-Cohen は、人間の認知傾向を二つの側面から説明する共感化－システム化（Empathizing-Systemizing ; E-S）モデルを提唱し、二つの自記式質問紙　共感指数（Empathy Quotient ; EQ）およびシステム化指数（Systemizing Quotient ; SQ）を開発した。一般に、女性では EQ が相対的に高く SQ が相対的に低い、男性では EQ が相対的に低く SQ が相対的に高いという傾向を示す。自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorder ; ASD）では SQ がさらに高い傾向を示し、EQ と SQ の乖離が ASD の判別に有用であるとされている。しかし、これまでこれらとパーソナリティ尺度との関連性についての検討は行われていない。

本研究は、成人の AS および健常者を対象に ASD 関連の質問紙（自閉症スペクトラム指数（Autism-Spectrum Quotient ; AQ）、EQ、SQ）および ASD に関連の深いパーソナリティ尺度（アイゼンクパーソナリティ尺度(Eysenck Personality Questionnaire ; EPQ)、統合失調症型パーソナリティ尺度(Schizotypal Personality Quotient ; SPQ)、対人的反応性指標（Interpersonal Reactivity Index ; IRI)）を施行して、これらの関係を明らかにし、AS の臨床的特徴と質問紙の有用性を検討した。

本研究の AS 群は男性 17 名、女性 7 名、健常群は男性 20 名、女性 6 名であり、両群間で性別に有意差はなかった。健常群と比較した結果、AS 群では AQ、SQ、EPQ-N スコア、EPQ-P スコアおよび SPQ が有意に高く、一方で EQ、EPQ-E スコア、IRI 総得点および IRI･想像性は有意に低かった。男女比較では、SQ が AS 群の男性で高い傾向にあった。

これらは、本研究の AS の診断妥当性を裏づけ、AS 群の低い共感能と高いシステム化能が適切に評価されたことを示す。また AS 群は内向的、神経症的および精神病的な傾向があり、奇妙な信念や社会不安等の統合失調症型パーソナリティ障害類似の特徴を有することも示された。各検査結果間の関係については、AS 群において、AQ と EQ との負の相関（r=－0.459）、AQ と SQ との正の相関（r=0.540）、EQ と IRI 総得点との正の相関（r=0.406）、EQ と IRI・視点取得との正の相関（r=0.452）が認められた。EQ と SQ との乖離は明らかであったが、相関は認められなかった。これらは、AS の自閉傾向が強いほど共感傾向は低くなりシステム化傾向は高くなることを示す。また ASD 関連の質問紙が、共感性を評価する IRI 以外のパーソナリティ尺度の影響を受けないことも示された。

以上より、EQ および SQ は、AS の低い共感能と高いシステム化能を反映する指標であるとともに、パーソナリティの影響を受けないため、成人の AS を診断する上で有用な指標となり得ることが明らかとなった。